

環境社会学の勃興と制度化過程—何を得て、何を失ったのか—

堀川三郎（法政大学社会学部）

1978年、アメリカで刊行された一篇の論稿によって環境社会学の誕生が告げられてから、35年。環境社会学は何を得て、何を失ったのか。日本の環境社会学の誕生と制度化の過程を素材に、この大きな問いについて少しばかり考えてみる—これが、本報告の目指すことである。

1990年にわずか53名で始まった日本の「環境社会学研究会」は、短期間のうちに600余名の会員を抱える世界最大の「環境社会学会」となり、自らの学会誌『環境社会学研究』を持つまでに至っている。短い歴史ながらも、異分野の研究者同士の交流や徹底したフィールドワークの伝統から諸理論を産み出してきた環境社会学会は、学会組織の運営という意味でも、ひとつの成功モデルとなってきた。

本報告では、この学問の初発の問題関心がいかなる発展を遂げたのかを概観する。学の制度化と安定化の陰で何が失われ、何が忘却されていったのか。学会が成し遂げてきたことだけではなく、成し遂げられずにいることをも含め、環境社会学の制度化の到達点と限界について、試論的にスケッチしてみたい。